

原 著

あがの市民病院 歯科・口腔外科における
訪問歯科診療の実態調査
—歯科衛生士の立場から見えてきたこと—

あがの市民病院、歯科・口腔外科；歯科衛生士¹⁾、歯科医師²⁾

山口美紀子¹⁾、高橋美砂子¹⁾、佐藤 聖巳¹⁾、久代 洋貴²⁾、辻内 実英²⁾

目的：あがの市民病院、歯科・口腔外科における訪問歯科診療の実態を調査し、今後の課題について検討を行った。

方法：2009年4月から2021年10月までの間に訪問歯科診療を行った150名を対象とし、性別、年齢、主訴、治療内容、基礎疾患、依頼元などについて調査した。

成績：調査対象は男性35名、女性115名。年齢は57～101歳で、80～89歳代が52.7%を占めた。基礎疾患は認知症、脳血管障害、心疾患等が多かった。主訴は義歯関連が多く61名、専門的口腔ケアは22名と少なかった。治療内容は義歯関連が76例、動揺歯抜歯が49例、専門的口腔ケアが34例であった。依頼元は家族からが57名であった。

結論：今回の調査結果により、要介護高齢者は口腔衛生状態が悪化しても自覚しづらい事がわかった。定期的な口腔内評価や、口腔ケアの技術を標準化する必要性があると考えられた。

キーワード：訪問歯科診療、専門的口腔ケア、要介護高齢者

必要性はさらに高まっていくと思われる。

そこで、当科における訪問歯科診療の実態を調査し、今後の課題について検討した。

対 象 と 方 法

2009年4月から2021年10月までの12年6カ月間に当科で訪問歯科診療を行った150名を対象とした。調査項目は性別、年齢、診療場所（居宅・施設）、主訴、治療内容、基礎疾患、依頼元とした。

結 果

1) 対象

調査対象者150名のうち、男性は35名（23.3%）女性性は115名（76.7%）であった。年齢は57～101歳で、80～89歳が合計79名で全体の52.7%を占めていた（図1）。診療場所は居宅が3名、施設が147名であった。

2) 主訴

主訴は義歯不適合や破損等、義歯に関するものが最も多く61名であった。動揺歯や歯肉の腫脹等、歯周疾患によるものが48名、歯冠修復物脱離が14名、専門的口腔ケアが22名であった（図2）。

3) 治療内容

治療内容は義歯調整・修理等、義歯関連が最も多く76例であった。次いで誤飲・誤嚥リスクの高い動揺歯抜歯が49例であった。多数歯抜歯の必要がある患者や出血傾向がある患者等、リスクが高い場合は入院管理下で処置を行っていた。歯冠修復物脱離は、ほとんどがう蝕や破折により再装着できず、単治や残根削合等の応急処置を行った（図3）。

4) 基礎疾患

対象者150名全員が基礎疾患を有しており、137名は複数の疾患を重複していた。認知症が85名と最も多く、次いで脳血管障害が51名、心疾患が34名であった。他にパーキンソン病や糖尿病、てんかん等、疾患は多岐にわたった（図4）。

5) 依頼元

患者家族からの依頼が57名と最も多く、次いで施設職員からが34名、患者本人からが16名であった。当院の外来通院及び入院中の受診から継続して行っ

緒 言

超高齢化社会を迎え、要介護者が急速に増加している。全国の高齢化は2020年28.8%となり、今後も増加していく事が予想される(1)。2025年の予想高齢化率は30.0%(1)であるが、当院の位置する阿賀野市では、2015年時点で30.1% 2021年には34.4%にまで達している(2)。要介護高齢者は寝たきりや歩行困難などで通院が困難な場合が多く、口腔内に問題を抱えているにも関わらず、適切な歯科治療を受けられていないと報告されている(3)。当院では2003年より病棟・関連施設の患者に対し、口腔機能の維持・改善と感染・肺炎予防を目的に歯科衛生士による専門的口腔ケアを開始した。2009年からは特別養護老人ホームの依頼のあった入居者に対し、歯科医師の指示のもと、歯科衛生士が週1回専門的口腔ケアを開始、さらに加えて2016年からは居宅や介護老人保健施設の入居者も対象に、歯科医師1名、歯科衛生士1名が同行し本格的に訪問歯科診療を開始した。

口腔機能の維持・管理は高齢者の生活の質（以下QOL）を支えるために不可欠であり、訪問歯科診療の

ている患者も8名いた。他に入所施設の内科嘱託医からの依頼や、他歯科医院からの治療継続依頼もあった(図5)。

考 察

今回の調査対象者は大多数が特別養護老人ホーム、老人介護保健施設入居者であり、その多くが認知症や脳血管障害など複数の疾患を有していた。口腔内は加齢に伴い保有歯数の減少、歯周組織の悪化、舌苔の増加といった変化を認め、そこに疾患による身体的・精神的な機能の低下が加わることで口腔環境の更なる悪化につながる(4, 5)。しかし、自身の口腔内の状態を正しく認識することは、しばしば困難であり、歯の動揺、歯肉の腫脹や疼痛など明確な症状が出現してから初めて周囲が気づき、診療依頼に至るケースが多くみられた。義歯に関する訴えは全体の40.7%と最も多かったが、これは義歯の不具合が摂食時に直接支障をきたすためと考えられた。専門的口腔ケアの依頼は14.7%と少なかったが、実際には主訴に対する治療と並行して口腔ケア・衛生指導が必要な事が多い。また、専門的口腔ケアの開始に伴い一時的に口腔衛生状態が改善するも、その後再度悪化するケースも散見される。患者の全身状態悪化や認知機能低下に加え、口腔ケアにかかる時間や人手が足りない、日常的口腔ケアを担う人それぞれの知識や口腔ケアの手技の得手不得手に左右される、担当者間において対象者の口腔状態に関する情報の共有・伝達が不十分であるといった要因も少なからずあると思われた。実際、介護の現場は多忙であり、現状では多くの介護施設や病棟において歯科医療職の介入が不足しているとの報告や、介護現場で口腔ケアを担う人員が不足している状況であるとの報告がある(6)。

日常生活動作(ADL)の低下している高齢者が多く入所する施設および在宅では、日常的口腔ケアはその多くが施設職員や家族に委ねられている。そのため、歯科専門職以外でも口腔内を簡易に評価(口腔アセスメント)でき、技術を一定レベルに保つこと(口腔ケアの標準化)の必要性(7, 8)を改めて感じた。

口腔ケアと誤嚥性肺炎との関連性(9)や口腔と全身状態の関連が指摘される中で(10)、要介護者の口腔機能の維持・管理はQOLを確保するために重要であり、高齢者の口腔の変化に早期に気づき、適切な歯科治療を行うことがう蝕や歯周病の予防だけでなく、口腔機能の維持・向上につながるとされる(11)。

今後も歯科衛生士として介護の現場に関わり、多職種と連携し積極的に意見交換できる関係を作っていくことが大切であると考ええる。

文 献

1. 内閣府. 令和4年版高齢社会白書、高齢化の推移と将来推計のグラフより入手. https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2022/zenbun/04pdf_index.html
2. 阿賀野市2022データ集、年齢別人口、高齢化率(資料 国勢調査). <https://www.city.agano.niigata.jp/.../group/3/data2022.pdf>

3. 日本訪問歯科協会ホームページ. <https://www.houmonshika.org/dental/state>
4. 井藤佳恵. 認知症医療・ケアにおける医科歯科連携と多職種連携. 老年歯学 2022; 36(4): 300-3.
5. 譽田英喜、新井康司、角保徳、安藤富士子、新野直明、下方浩史. 中高年の口腔所見に関する研究. 日本未病システム学会雑誌 2004; 10(1): 100-2.
6. 目黒道生、富山祐佳、小出康史、小林芳友、小林直樹、藤原ゆみ、岩田宏隆、菊田典子、久保克行、佐藤公磨、山部こころ、山本大介、澤田弘一、高柴正悟、松尾浩一郎. 高齢者病棟および高齢者施設における歯科医療職の人材配置. 老年歯学 2013; 28(2): 79-87.
7. 荒井昌海、松尾浩一郎、田口知実、森田英明. 老人介護保健施設における口腔衛生管理の長期的効果—Oral Health Assessment Tool スコアでみた変化—. 老年歯学 2020; 35(1): 52-60.
8. 中野雅徳、尾崎和美、白山靖彦、松山美和、那賀川明美、中江弘美、伊賀弘起、大熊るり、藤島一郎. 要介護高齢者の口腔ケアを支援する簡易版アセスメントシートの開発. 日摂食嚥下リハ会誌 2014; 18(1): 3-12.
9. 米山武義、鴨田博司. 口腔ケアと誤嚥性肺炎予防. 老年歯学 2001; 16(1): 3-13.
10. 吉田光由、菊谷武、渡部彦彦、花形哲夫、戸倉聡、高橋賢晃、田村文誉、赤川安正. 肺炎発症に関する口腔リスク項目の検討—口腔ケア・マネジメントの確立に向けて—. 老年歯学 2009; 24(1): 3-9.
11. 佐藤理恵、中村友香、石田敬子、中井美佐子、今田直樹、島田節子、藤井辰義、鱈川哲二、沖修一、荒木攻. 脳卒中急性期における早期口腔ケア介入による誤嚥性肺炎の予防効果とQOL. 日摂食嚥下リハ会誌 2015; 19(2): 136-44.

英 文 抄 録

Original article

Investigation of Visiting Dental Practice in Department of Dentistry and Oral Surgery at Agano Shimin Hospital: Discoveries from the Standpoints of Dental Hygienists

Department of Dentistry and Oral Surgery, Agano Shimin Hospital; Dental hygienist¹⁾, Dentist²⁾
Mikiko Yamaguchi¹⁾, Misako Takahashi¹⁾, Kiyomi Sato¹⁾, Hiroki Kushiro²⁾, Mie Tsujuchi²⁾

Objective: The actual circumstances regarding visiting dental practice in the Department of Dentistry and Oral Surgery at Agano Shimin Hospital was investigated to identify the issues going forward.

Study design: The study was conducted with 150 patients who received visiting dental care from April 2009 to October 2021 with an investigation of the items that included sex, age, chief complaint, details of treatment, underlying conditions, and the party requesting dental care.

Results: The study was conducted with 35 males and 115 females aged 57 to 101 years with the age group of

80 to 89 years occupying 52.7% of the study population. Common underlying conditions included dementia, cerebrovascular disorders, and cardiac disorders. Chief complaints frequently reported were those related to dentures, reported in 61 patients, while the number of patients with specific oral care was low at 22 patients. Treatment details were those related to dentures in 76 patients, extraction of loose teeth in 49 patients, and specialist oral care in 34 patients. The party requesting care was family mem-

bers for 57 patients.

Conclusion : The result of this investigation showed that elderly people requiring nursing care have difficulty recognizing deterioration of oral hygiene in themselves, suggesting the necessity for periodic oral assessment and standardization of oral care techniques.

Key words : Visiting dental practice, specialist oral care, elderly people requiring nursing care

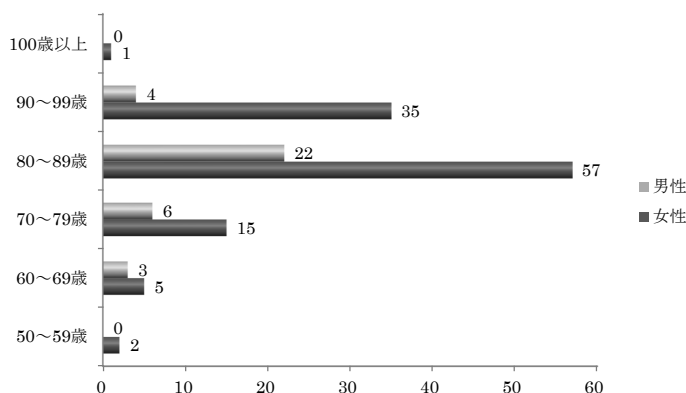


図 1. 患者年齢及び性別
57~101歳で80~89歳が合計79名で全体の52.7%を占めた。

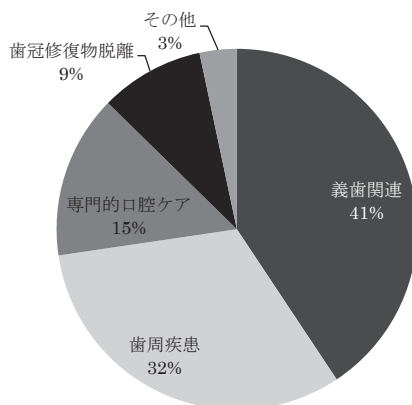


図 2. 主訴
義歯関連が合計61名で全体の40.7%を占めた。

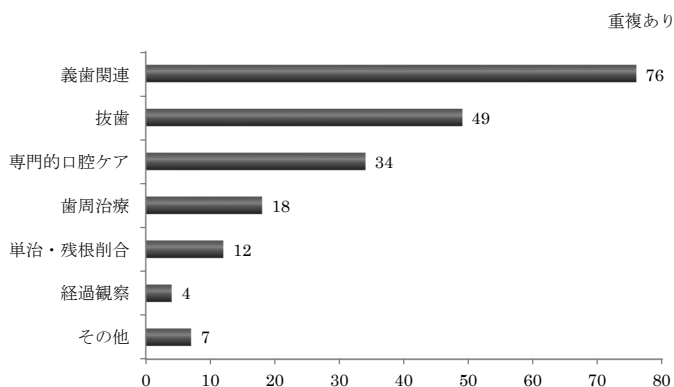


図3. 治療内容
義歯関連が76例と多く、専門的口腔ケアは34例であった。

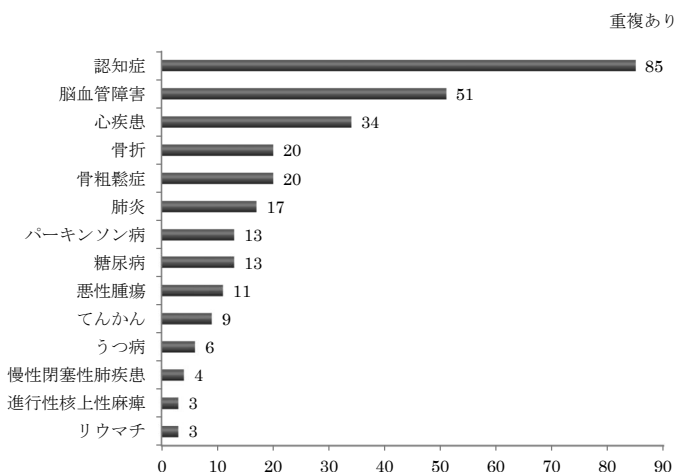


図4. 基礎疾患
認知症が85名と多く、ほとんどが複数の疾患を重複していた。

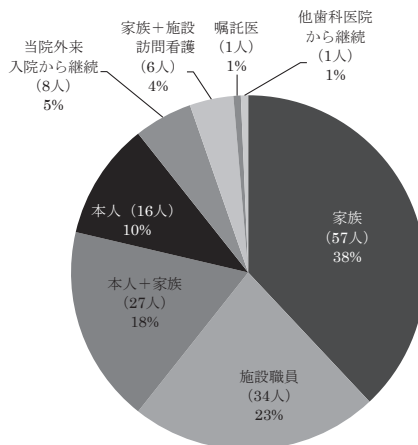


図5. 依頼元
家族からの依頼が38%と最も多かった。